



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

# NEWS LETTER

特集 泡の不思議

vol. 15 | 季刊 2010 春



表紙写真

芝生広場でひとしきり遊んだあと、父と子が「トンネル窯」に入ってきました。そこは早春のあたたかな光が満ちる外とは別世界。全長16mのタイムトンネルです。

(2010.2.21)

撮影：村山直章

## [特集] 泡の不思議

02 大地から、宇宙の彼方へ  
時空を超える泡の旅 増永浩彦さん

04 日本文化の泡を探る  
悟りは、「泡」を超えて 庄司信洲さん  
抹茶の泡は、おもてなしの心 庄司宗文さん  
円相を読み解けば

### LIVE REPORT

06 開催報告  
企画展 泡と湯気—愉楽の発見—  
関連イベント  
泡を食べる、泡を飲む—「美味しい泡」の秘密、その味わい—

07 企画展 タイルに咲いた憧れの花・バラ  
—19世紀ヴィクトリアンタイルから—  
関連講演会 バラの魅力とその文化史 上田善弘さん  
関連イベント バラのヴィクトリアンタイル絵付け体験

春のデコ・モザイク体験

### LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

「特集」

# 泡の不思議

空気のように当たり前のものとして、誰も気に留めることのない「泡」。しかし、はかなく消えていく泡は、暮らしの中で、科学の世界で、書やお茶の世界で、時に、なくてはならない存在として、私たちの目の前に躍り出る。あらためて、泡の世界を見つめてみた。

## 常滑から\*

14

### 陶器製丸型墓標



数多くのやきものをつくってきた常滑では、それらの再利用も盛んに行われてきました。街のいたる所で見かける焼酎瓶、土管、タンマ<sup>1</sup>を利用した塀・土台・擁壁など。鉄が不足した戦時中には格子状の溝蓋もつくられました。最近の例では、電線管<sup>2</sup>を土台や壁全体に使用したすこい家が多屋地区にあります。

常滑では江戸時代末期から鯉江家によって土管製造が始まり、明治中期には量産体制が確立、街なかの工場でも製造が始まりました。右端の写真、左は明治中期につくられ、東京都品川区の仙台坂遺跡<sup>3</sup>から発掘されたもの、右は金型を使用した近代のマンガン釉土管です。

伊藤肇（ものづくり工房スタッフ）

\*1: 石炭窯の基礎を築いたり出入口を塞いだりするために使われた煉瓦の塊 \*2: 電話や電力用地下ケーブルを保護するための管路 \*3: 仙台藩の下屋敷の遺跡

※ INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

# 時空を 超える 泡の旅

大地から、宇宙の彼方へ

## 泡沫のゆくえ

石鹸水に浸したストローを持ち上げながら、少女は一瞬ためらいを見せる。

少しでも気が急くとたちまちシャボン玉が弾け散ってしまうことを、子どもは子どもなりに学びつつあるのだ。不器用にしかし細心の注意を払いながら、くわえたストローにそっと息を送り込んでみる。すると透きとおった小さな球体はみるみる膨らんでゆき、やがて羽化したばかりのモンシロチョウのようにぎこちなく宙へ漂い始める。淡い虹色にゆらめくその繊細な輝きにすっかり魅せられ、少女は吸い込まれるようにシャボン玉を見つめ、飽きることがない。

シャボン玉の歴史は、思いのほか古い。日本史の記録にシャボン玉が登場するのは17世紀（江戸時代中期）だということから、私たちは300年以上前からシャボン玉と戯れてきたわけだ。泡沫という美しい言葉が象徴するとおり、絶え間な

く現れては消えてゆく可憐な泡のはかなさは、どこか日本人の美学に訴える魅力があるのかもしれない。

## 太古の記憶を 呼び覚ます

しかし泡沫は時として、途方もない歳月を超え極寒の大地の深淵に眠り続けることがある。その永い眠りをそっと解くのは、極地の氷床から長大な氷の杭を切り出す科学者たちだ。厚いところは数キロメートルの深さに及ぶ南極やグリーンランドの氷床は、降り積もる雪が永い年月にわたり自身の重みで凝縮されて形づくられた、広大な氷の大地である。

氷床から掘り出されるアイス・コアと呼ばれる氷柱には、道端の露頭に顔を出す地層の断面のように、遠い昔の地球を知る手がかりが刻み込まれている。気候学者は、アイス・コアに閉じ込められ

## MARUYAMA Hirohiko 増永 浩彦

名古屋大学 地球水循環研究センター 准教授

た微小な空気の泡に、細心の注意を払う。アイス・コアの間隙にひそむ気泡は、いにしえの大気のひとつひらが積雪に紛れて氷床の内部に忍び込んだ、いわば地球大気の化石だ。科学者は、気泡から採取したわずかな空気の化学組成や同位体比を分析し、過去の地球の大気成分や当時の気温を復元する。サンプルの条件が良ければ、数千年の有史時代を遙かに超え、過去数十万年にわたり繰り返された氷期・間氷期の絵巻を連続とよみがえらせることもできる。

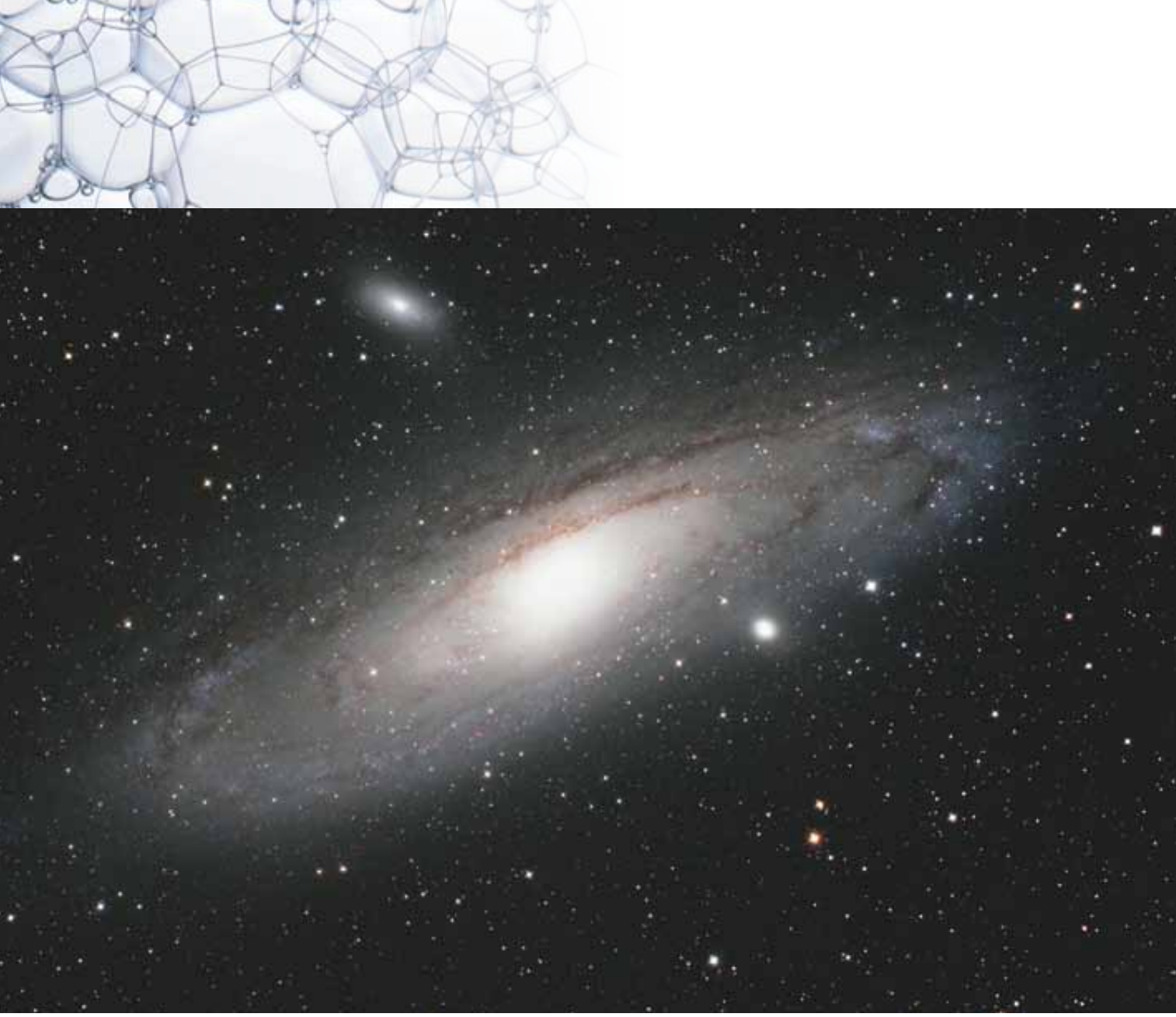
運命のいたずらにより雪の一片に閉じ込められた小さな気泡は、とびきり辛抱強いミクロの使者だ。太古の気候を記録した手紙を託されたその日から、封が解かれる永遠に近い未来を、氷の底でじっと待ち続けている。

## 銀河系に 思いを馳せて

明るい都会の夜空で天の川を目にすることはかなわないが、街の灯から遠く離れて満天の星空を見上げれば、地球が巨大な銀河系の一部であることを体感することができる。そして私たちの天の川銀河は、さまざまな姿をした無数の銀河とともに、さらに広大な宇宙をつくり上げている。夜空をのぞむ望遠鏡の感度が十分に高ければ、レンズの向こうには夥しい数の渦巻や楕円体が織りなす銀河のモザイク画が広がる。

1980年代以降、根気よく銀河の分布地図をつくり上げた天文学者たちは、宇宙の構造に想像を絶する規模の秩序が存在することを発見した。銀河は夜空にばら撒かれた砂のようにランダムに点在するのではなく、多数の銀河が壁状に集まる「グレート・ウォール」と、壁と壁の間に広がる巨大な空白地帯を形づくっていたのだ。銀河のモザイク画の全容は、点の濃淡で対象の輪郭を浮かび上がらせる点描画さながら、総体として特大のシャボン玉がいくつもつながったような泡構造が立ち現れる、壮大なタペストリーなのである。

夜空に君臨する天の川は、さしわたし一億光年に及ぶ「泡」の一つ、その縁のどこかに浮かぶありふれた銀河の一つに過ぎない。その銀河系の辺境に浮かぶ、頼りないほど小さな天体の上で、68億の人類は今日も身を寄せ合うように生きて



撮影／西村拓也

増永 浩彦  
(ますなが ひろひこ)  
1972年生まれ。東京大学大学院理学系研究科博士課程修了、博士(理学)。宇宙開発事業団(現・宇宙航空研究開発機構)宇宙開発特別研究員、コロラド州立大学研究員などを経て、2006年より現職。専門は気象学・気候学。衛星観測データ解析により雲や雨をめぐる気候の仕組みを解明することに主に取り組んでいる。

# 悟りは、「泡」を超えて

庄司 信洲 SYOJI Shinsyu 嵯峨御流いけばな教授 万葉いけばな研究家

日本文化のなかにて、泡や湯気はどう意識されてきたのだろう。私は、その原点は枯山水にあると思っている。

枯山水は、日本の庭園様式の一つであり、その発展の背景には鎌倉時代の武家政権の成立と、禅宗の隆盛が大きく影響している。禅宗は、境地に悟りを得た心境を重んじる思想であり、禅僧の生活の場である寺院、その庭園のつくりも修行に大きな役割を果たしている。

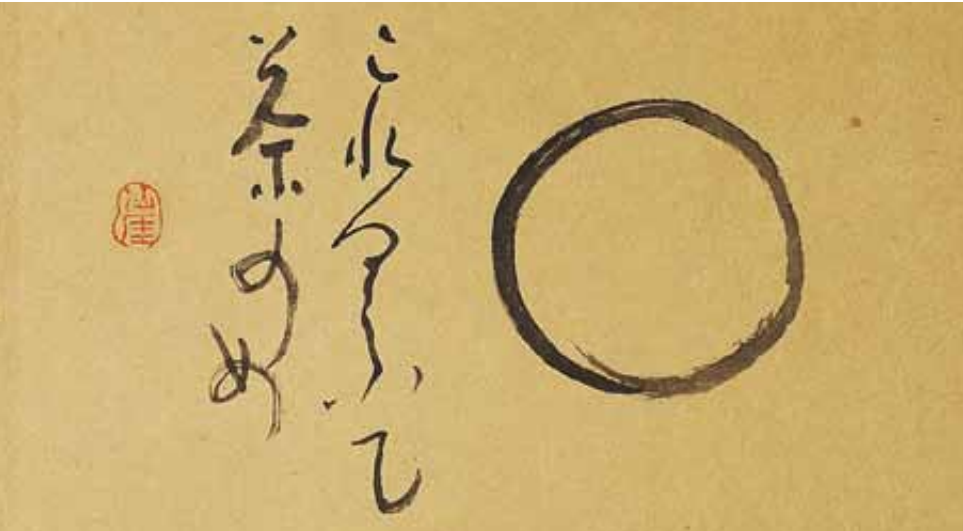
そうした枯山水には、禅の精神を映しだそうとする僧たちの思いも込められている。米を盛った容器を破沙盆（はさぼん）というが、禅宗では、壁に囲まれた枯山水の庭園を、この破沙盆に見立て、その時、白砂は米粒となる。それは人間にとって「食」が大切なものであり、感謝して天地の恵みをいただくことに通じている。

当然、米粒のままでは腹は満たされない。かまどで炊き、ぶくぶくと泡が立ち、おいしいご飯となる。その匂いをかけば唾液が口に広がる。そうして炊かれた米を喜びを持っていただき、次に排出する。枯山水の庭園というのは、人が生をつなぐ循環を表すのであり、悟りを求める僧侶がそれに面すれば、そこに命の原点を見出し、みずみずしい心を保つことにつながったのではないだろうか。

そういう意味で、米は炊かれ泡を吹かせ、人は唾液で命をつなぐ。「泡」とは変化の象徴と言ってもいいかもしれない。泡が変化する過程は、どこかぬくもりがあって人の心を満たしてくれる。(談)



# 日本文化の泡を探る



## 円相を読み解けば

ここに一枚の書画。  
「これ具ふて 茶のめ」とある。その言葉の横に図形の丸。  
まあるい人の心を表しているのか、茶碗に生まれた泡粒を表しているのか、はたまた、人を拒まず、相和して、ひと時を共有するお茶の精神を表しているのだろうか。

この書画は、江戸時代に臨済宗の再興を果たした仙厓義梵（1750〜1837）の作品である。

権威を嫌い62歳で法席を退いて隠棲した後は、人々に詩文や書画を描き与え、仙厓和尚として愛された人物。禅の境地をわかりやすく説き明かし、軽妙洒脱、ユーモアに富んだ作品は、今も人々を魅了する。

仏教の世界では、円は、円相（えんそう）一円相とも言い、宇宙の究極の姿を指すと言われている。万物の根源となる「空、風、火、水、地」の5つの要素。これをひと筆で表現したものが「円」。欠けることのない真理を表し、森羅万象の宇宙を最も簡潔に描く。

その円相を描いて、「茶を飲め」とは。円相の解釈は、見る人に委ねられ、さまざまに広がっていく。

今の時代の人々が、どんなふうにいるかを巡らせるのか、仙厓和尚が、どこからほくそ笑んで見ていることだろうか。

# 抹茶の泡は、おもてなしの心

庄司 宗文 SYOJI Souben 裏千家教授

抹茶の泡について語るなら、まずはお茶を飲んでもらうのが一番。とはいえず、誌面ではままならない。そこで、私が代わりにならば、泡を立てないお茶は口の中にざらつとした触感が残る、苦味がある。一方、泡を立てたお茶は、茶の表面をふわっと緑が覆っている。茶碗に顔を近づければ、ほのかに香り、口をつければ柔らかな感触、はかなく消えてゆく泡の微かな音も聞こえる。味はもちろん、まろやかで甘い。科学実験のごとく同じ湯の温度、同じ抹茶の量で試していただくといい。これほどに違うものかと驚かれるだろう。私は、泡を立てたお茶というのは、五感で味わうものだと思っている。目で楽しみ、触れて楽しむひとは、まさに癒しの時間である。

鎌倉時代、日本に禅宗を伝えた栄西や道元によって持ち込まれた抹茶は、その後、武野紹鷗（たけのしょうおう）その弟子、千利休によって安土桃山時代に完成された。当時のお茶は泡を立てないが、江戸時代になると、できるだけ細かい泡を立てて飲むようになった。誰が、なぜそうしたかは、わからない。高邁な理由ではなく、その方がおいしいと気づいてしまったのだろう。お客様においしく、楽しく差し上げたいという思いから始まったのではないか。「和敬清寂」—茶の湯の本意とは、おもてなしの心。いかに喜んでいただくかだ。私は、気（心）を入れて少し強めに茶筌（ちしん）を振る。そうして空気を送り込む。ある程度混ざったら泡を細かく整える。しゃしゃやかと茶筌の音。それはおいしいお茶の始まりである。(談)

